動きたい

ひと汗いかが

# 復活して「ヒット」を狙う

## バスケットピンポン　和歌山市・みその商店街

1966年に和歌山県で誕生し、他県でも企業などで一大ブームとなった「バスケットピンポン」。和歌山市美園町のみその商店街で人気復活への試みが始まっている。昨年開催した2大会には子どもからお年寄りまで幅広い世代が参加。年齢や性別を問わず気軽に楽しめるのが魅力で、「世代を超えた人の輪」をじわじわと広めている。また、両手を使ってプレーすることで脳を刺激するほか、敏しょう性も高めるなど健康にも効果があるという「バスピン」に挑戦した。【岡村崇、写真も】

商店街で熱戦が繰り広げられている「バスケットピンポン」＝和歌山市美園町の「みその商店街」で

商店街の活性化を模索する地元の商店主やNPO関係者、和歌山市の職員ら8人から「昔はやったバスピンを生かしたら」とアイデアが出て、昨年9月に「バスピンdeまちづくり実行委員会」を設立。アーケード内で同10月に「第1回まちづくりカップ」を開催、1チーム3人で8チームが参加。12月に開いた「歳末大売り出しdeバスピン大会」への参加は、14チームに増えた。

バスケットピンポンは、卓球台の約4分の1の縦120㌢、横60㌢の台を使う。卓球のボールを使い、ルールもほぼ同じ。ただ、両サイドに直径10㌢の穴があり、相手側の穴にノーバウンドで入れば「ヒット」として2点を得られる。サーブはラケットを握っていない手を使って相手側に投げ入れる。1セット11点で3セットマッチだ。

わずかな卓球経験しかない記者もラケットを握ってみた。小さなコートに戸惑うかと思ったが、割と簡単にラリーが続く。しかし、穴に入れるのが意外に難しい。穴の縁に当たりはじいてしまうなど、なかなか思うように「2得点」できなかった。ムキになって続けるうち、取材を忘れ無言で打ち込んでいた。思った以上に熱中したプレーの後は、初対面だった対戦相手との話も弾む。短時間でも、相手や周囲の人と距離が縮まった気がした。

毎月第1、第3火曜日の午後7時から、実行委は事務所前でバスピンをプレーしている。自由参加で無料。メンバーや関係者だけでなく、通行人が飛び入りで参加することも珍しくない。卓球経験がなくバスピン初体験の人でもすぐに慣れ、スマッシュを打ち込むこともあるという。定期的に参加している会社員の前山不二信さん(47)＝和歌山市＝は「一度ヒットが入ったらくせになって、ついつい引き込まれてしまう」と笑顔で話す。

実行委は今後も商店街との「コラボ」を検討しており、商店街内で保険代理店を営む川島忠弘委員長(43)は「人の輪が確実に広がっている。小さく始めて、いずれは大きな大会を運営できれば」と意欲的だ。

### 60～70年代にブーム

元和歌山県教育次長の故北原雄一さんが「親子で楽しむためのスポーツ」として考案した。1960年代後半から70年代前半にかけてのブーム以降も、田辺市では毎年、小学生対象の大会を開催している。

「バスケットピンポン」台は折りたたみ式で約9㌔。ラケットを収納でき、持ち運びにも便利だ。台の高さも70㌢と47㌢の2段階式に調整でき、大人だけでなく子どもも無理なくプレーできる。

商店街イベントについての問い合わせは、実行委にEメールbasupin_wakayama@yahoo.co.jpで。卓台の注文やルールの詳細などについては、日本バスケットピンポン（電話073・461・6511）へ。